

長崎「親子記者事業」に参加して 奇跡的に助かった早崎さんを取材 戦争は悲惨、残酷。二度と起こしては…

私はこの夏休み「原爆の被害や平和の大切さを長崎で学び、取材する親子記者事業」に参加しました。

長崎では8月9日に、平和式典に参列しました。そして、自らの被爆体験を語り継ぐ活動をしている被爆者の方や、平和活動をしている人を取材し、「親子記者新聞」を作りました。

私が一番心に残った取材は、被爆者の 早崎 猪之助 さんです。

早崎さんは昭和20年8月9日、爆心地より1キロ離れた兵器製作所で工作中、被爆しました。当時14歳でした。

当日、上司の指示で、部品の修理をする別のビルに移動した時、時刻は11時1分でした。その後すぐ11時2分に原爆が落ちました。早崎さんは爆風で飛ばされましたが、大きな柱に守られて奇跡的に助かりました。その時、耳から血が出て両耳が聞こえにくく、喉も焼けて声がでませんでした。

最初は大天災が起こったと思ったそうです。その日の朝は空襲警報が解除されていたからです。

町には、こげて死んでいる人がたくさんいました。「水がほしい」と、たおれている人が大勢いたので、浦上天主堂に水をくみに行き、水を配りました。でも、水を飲んだ人は次から次へ死んでいってしまいました。その中には同級生の子もいました。

早崎さんは水を飲ませたから死んでいったと思い、自分が生き残った事を悔やみました。

「原爆は恐ろしく、戦争はおろかだ」と早崎さんはおっしゃいました。

早崎さんの片耳は、今でも完全に聞こえません。91歳になっても、原爆・戦争の恐ろしさを人に伝える活動をしていて、すばらしい人だと思いました。

私は被爆者の生の体験を聞いてよかったと思います。戦争体験のない私たちは戦争の悲しさ、恐ろしさ、残こくさを知らなければいけないと思うからです。

そして、今の日本が平和のままでいられるのは、平和活動を続けている人たちがいるからだと思います。

私は平和活動について学んでいくうちに、高校生平和大使の合言葉「微力だけど、無力じゃない」という言葉を知り、共感しました。

一人一人の平和への活動は、微力かもしれませんが、目をそむけたくなる戦争の歴史でも、伝え続けなければいけません。それは無力ではなく、平和につながっていくと思います。

私は長崎親子記者事業に参加して、戦争の事を真剣に考えることができました。あらためて、戦争は二度と起こしてはいけません。核兵器は使われてはいけません。

(鈴鹿市立飯野小学校5年 小河 加奈)

親子で取材・執筆。長崎の4日間

「戦争と平和」を考える

今年8月8日から11日の4日間、私たち親子は長崎市に滞在し、戦争体験者の取材を通じ戦争を考える機会を得る事ができました。

「日本非核宣言自治体協議会」という全国約300の自治体が加盟している組織が毎年、夏休みに全国から募った9組の親子に、被爆体験者の取材、「長崎ピースタイム」という新聞記事の作成を体験してもらう企画です。15年の歴史があり、今年は全国から92組の応募がありました。見事当選して私たちは中部地区代表として参加しました。鈴鹿市の選出は初めてだそうです。

● 鈴鹿を事前取材

「あなたの街の戦争体験や遺跡を調べて下さい」と事前課題があり、「市民の会」の人たちに2回に分けて市内の戦争遺跡を案内して貰いました。それまでは鈴鹿サーキットやお茶の名産地の印象しかなかった郷土が、この見学で「町の歴史は戦争の歴史」という認識に変わりました。

そして迎えた8月8日、白子駅7時4分発の名古屋行特急を乗り継ぎ13時半過ぎに長崎の原爆資料館に到着。開会式で田上 富久 市長の歓迎あいさつで「皆さんの一生の宝になる事を祈る」と激励を頂き、早速取材開始。

一人目は江口 凜 さん、中島 彩華 さん。二人は長崎純心大学に通う三回生で毎年8月9日にドイツの学生とオンラインで戦争について意見交換する活動を行っています。当時ドイツはナチス政権によるホロコーストがユダヤ人を迫害していました。被爆地長崎と迫害活動のドイツ。戦争の立ち位置は違うが、戦争は二度と起きてはいけないと平和の尊さを思う気持ちは両国学生共同の気持ちでした。

● 式典に参加

二日目8月9日、朝から式典に参加です。職員に誘導されながら会場の平和記念公園に到着。資料館から5分の距離です。広大な公園内を移動中、至る所で祈念イベントや国葬反対デモが行われて世間の関心事が集中している気持ちです。先の奈良の襲撃事件の影響か警備も厳重で会場に入るまで三度もチェックを受けました。

物々しい雰囲気の中、10時40分、被爆者の方達で編成された合唱団「ひまわり」の「もう二度と」の合唱が流れ開式。続けて原爆死没者名奉安（令和4年8月9日現在192,310名）、式辞、献水、献花と行われ、午前11時2分黙とう。この1分の間、被爆者の無念や悲しみはとても自分が想像できる次元でなく、かける言葉もありません。只々、戦争は二度と絶対起こしてはいけません。勝敗があっても残るのは一生続く後悔と恨みだけです。

黙とうが終わると田上市長の長崎平和宣言が表明され、「長崎を最後の被爆地に」を合言葉に核兵器廃絶と世界の恒久平和の実現に取り組む強い意志を感じました。被爆者代表で宮田 隆 氏が「平和への誓い」を述べられました。当時5歳の宮田氏は爆心地から2.4キロ

あった自宅の8畳間から玄関口まで飛ばされ、母親の胸の中で目覚め、その時の母親の鼓動は今でも残っています。「日本政府は核兵器禁止条約に署名、批准して下さい」の言葉に、被爆者全員の悲願の思いを感じました。

● ギリシャから聖火

式典を終え、園内を歩いていると大きなアート作品に点火されているのが目にとまり、主催者の方に取材しました。「折鶴パフォーマンス」と呼ぶこのイベントは毎年8月9日に行われ、「長崎を最後の被爆地とする誓いの火」という作品は全長5桁位あり、全体が白いタイルで覆われててっぺんに炎が舞い上がっています。古代ギリシャでは聖火が燃えているオリンピック期間中は全ての戦闘が中止された。この炎は平和のシンボルであり、特別にギリシャ政府から贈られた物だそうです。

資料館に戻ったあとにハプニングがありました。昼食を取るため外に出て戻ろうとしたら複数の警備が立っており、中に入れてくれません。午後から取材が控えており、時間が迫り気があせります。親子記者であることを説明してもなかなか入れてくれません。別の職員に話してやっと別の通路から入れてもらいました。後で聞いた話では岸田首相が資料館に来館しているので、入場規制していたそうです。

● 91歳の証言

私たちは急いで昼食を終え二人目の取材相手である 早崎 猪之助 さんにお会いしました。早崎さんは御年91歳。被爆時は14歳でした。当時、三菱兵器製作所大橋製作所に勤務していた早崎さんは、上司の指示で部品の修理をする別の技術ビルに移動して仕事していました。

その時11時1分。その直後爆風で14mも吹き飛ばされたが、145cmの柱が壁となり、幸い一命を取り留めました。最初は何が起きたか理解出来ず、自然災害と思ったそうです。その日の朝は空襲警報が解除されたと伝えられていたからです。しかし被爆した。当初辺りは煙が立ち込め周囲が見渡せず誰も見当たらない。おまけに耳は聞こえない、目がかすんで良く見えない、喉がひりひりする状態でした。

辛うじて外へ出て誰なのか判別できない位、紫色に変わり果て横たわった丸裸の人々。道行く途中で「水、水」と懇願する人々。「あの中にお母さんがいるの」と崩壊した家を指さす男の子。助けたくてもどうする事も出来ない自分。ひたすら申し訳なかった無念さを語られました。

取材時間を大幅に超えても思いをぶっつけるように体験を語って頂きました。風化させない為これからも語り続けたいと意欲を見せておられました。敬意を表するとともに感謝の言葉しか見当たりません。

● 2本の記事を出稿

三日目は一日中記事作成です。この日で原稿を完成させなくてははいけません。二つの記事がノルマです。一つの記事に300字の字数制限。意外と大変で無駄な言葉や言い換えの修正を何度もしながらの作業でした。正に親子の共同作業でした。

記事作成後は時間があつたので原爆資料館を見学しました。被爆した建物の鉄柱や遺留品、

被爆した街や人々の写真が展示されており、投下された原爆模型、通称「ファットマン」を見た時は言葉が出ませんでした。

四日目最終日は取材体験の発表会です。原爆資料館のホールで市長、歴代館長、被爆した人、外から来館した人など招きました。地元の新聞社も取材に来ました。

一組の親子の持ち時間5分のスピーチが与えられ、子どもが先に話します。私たちは少し長めのスピーチでしたが、どの親子もこの三日間、戦争について真剣に考えた思いが伝わる発表会でした。

全9組の発表を終え田上市長が講評、平和活動を意味する「金色の鳩バッジ」を頂き、正午に無事全日程を終了しました。観光など自由時間もほとんどなく取材と記事作成に専念した4日間でしたが、戦争・平和に真剣に向き合う事ができました。一生の思い出を親子で体験できた事に感謝します。娘も当初、戦争の怖さを知るのを嫌がっていましたが、実際に体験して考えが変わったようです。

● ぜひ被爆地を訪れて

そもそも今回参加しようと思ったのは、私の子どもの頃は戦争体験した先生が多く、当時の様子を聞く機会がありましたが、娘の代ではそんな話を聞く事はありません。「負の歴史を知らずに大人になって良いのだろうか、大人の自分も理解できていないのでは?」。そんな疑問がきっかけでした。

実際に行って私は戦争の悲惨、平和の尊さがより大きくなりました。原爆が怖いと分かっているにも爆心地から 1.5 キロ圏内の家屋が全壊する威力だったとは行った人でないと分かりません。ぜひ一人でも多くの方が広島、長崎を訪れ考えてほしいと思います。答えは出ないかも知れませんが、親子で考えてほしいです。そうすれば人を認め思いやる気持ちを覚え、無駄な争い事も日常でもなくなるはずです。私はそんなマンパワーを信じてこれからも平和活動に親子で取り組みます。

(小河 正樹)



折り鶴の前の加奈さん



長崎市 田上市長と

長谷川八寿雄さんが講演「配属将校に殴られた」 格納庫部材、パラシュートなど初展示 市制施行80年記念「講演と対話のつどい」開く

鈴鹿市が誕生してちょうど 80 年。それを記念して 11 月 6 日、ジェフリーすずかで「鈴鹿にも戦争があった あのころといまと 講演と対話のつどい」を催しました。毎年、記念日前後に講演会などを開いてきましたが、今回は展示を充実させるとともに、彫刻家、長谷川 八寿雄 さん(92)に軍国教育をくぐった青年時代を語ってもらいました。併せて、市民の会の今後について、会場の参加者といっしょに考える場を持ちました。参加者約 60 人の盛り上がった会になりました。



長谷川さんは昭和 19 年、旧制神戸中(現神戸高校)に入学。7 番の成績だった。先生から陸軍幼年学校に行くことを勧められ、応諾した。しかし、養子の一人っ子であることから親が反対。翌日、先生にいきませんと話す。と、配属将校らに竹の棒で幾度となく頭をたたかれた。痛さをこらえて耐えたが、学校の成績は一気に 70 番まで落ちてしまった。そんな体験をはじめ、戦後、教員そして彫刻家になって現在に至るまでを、ユーモアたっぷりに話された。

続いて「対談、対話」。市民の会の 14 年の活動を振り返りながら、今後の最大の課題、平和資料館設立の取り組みなどを話し合いました。旧陸軍の防空壕を町指定文化財にした明和町について「2 万数千人の人口だが正規雇用の学芸員が 3 人いる。首長の姿勢次第」と発言があるなど会場からたくさんの意見が寄せられました。

会場ホールの南、西、北の三方を展示にあてました。入口付近に 森田 英治 さん方に保管してもらっている格納庫の部材。下に毛布とビニールシートを敷いて屋根と横引き扉の部材、配電盤、電灯、外溝の蓋などを展示しました。鈴鹿市考古博物館から借り受けた秤、薬瓶、工員印、通門証など 15 点、九条の会すずかが制作した鈴鹿の空襲の立体模型、鈴鹿市の誕生を載せた伊勢新聞、パラシュート、出征見送りののぼり、今ある学校や会社にはかつてどんな軍事施設があったか一覧表と写真、鈴鹿海軍工廠のポスター。小河 正樹 さん、加奈 さん親子が長崎で作成した親子新聞「ナガサキピース・タイムス」も飾りました。

対談・対話のあと、次のような「まとめの言葉」を読み上げました。

「14 年前、まだ残っていた 3 棟の巨大格納庫が取り壊されそうになり、何とか阻止しようとして私たちの運動は始まりました。力及ばず取り壊されましたが、この取り組みを通して私たちは 2 つの町と 12 の村が大合併して軍都として誕生した重い歴史を自覚しました。格納庫を所有していた NTT 西日本から格納庫の部材の一部を譲り受け、大切に保管しております。これまで、市内各所に残る戦争遺跡の見学会、講演会、「桜の森公園」の春まつり、

小中学校への出前授業などの活動を重ねてきました。広く市民に、とりわけ子どもたちに市の生い立ちを知ってもらおうという思いからです。恒常的に市の歴史を学ぶ場がどうしても必要です。それには行政当局の力が欠かせません。鈴鹿市と協力して平和資料館を実現することを、この場で誓い合えたらと思います」



出征見送りののぼりとパラシュート



格納庫の部材など

**「こんなにたくさん軍施設があったなんて」
「戦争でできた市なんだ」
鈴鹿市立玉垣小学校で出前授業**

鈴鹿市立玉垣小学校で、10月5・6の両日、「市民の会」の桐生 小百合 と 竹内 宏行 が5年生(4クラス、130人)に出前授業をしました。全域に軍事施設が広がる鈴鹿市の地図、満州事変(1931年)から敗戦(1945年)までの年表、合併した2町12村の名前をプリントして渡し、遺跡の写真ざっと30枚を拡大投影機を使い1枚ずつ映して説明しました。敗戦の2年半前に生まれた竹内はニューギニアで戦死した叔父一家のことを語りました。子どもたちの感想を紹介します。

● 鈴鹿市の誕生

「戦争があったことで鈴鹿市ができたんだなあと思いました。きちだらけだったんだなあと思いました」

「鈴鹿市は戦争のためにがったいされた市だなんて初めて知りました」

「私は戦争で鈴鹿市が出来たなんて初めてわかったので、すこししょうげきでした」

「鈴鹿市がこんなに戦争に関わっているなんて知らなかったからびっくりしました。特に桜の森公園も関わっているのは本当に戦争があったと実感しました」

「ぼくは戦争のあとが今、鈴鹿市にたくさんあるのがおどろきでした。昔のまちは戦争のじゅんびしせつがたくさんあった」

「鈴鹿市は軍の工場や飛行場なんかがたくさんあったんだなと思いました。天気を調べる所が日本で1つしかないのに鈴鹿市にあってすごいと思いました」

「鈴鹿市は3~4つくらいの村で作られた市だと思っていたので、こんなにもたくさんの村で作られた市なのだと知り、びっくりしました」

● 学校の近くにも

「千代崎中が建っている土地に軍施設があったなんておどろきました」

「いつも帰り道に中学校の前を通っているのですが、その中学校が軍しせつあとだということにおどろきました」

「最初は戦争って本当にあったの？と思って信じきれていませんでした。でも千代崎中学校のところに白いあとが残っていた」

「千代崎中学校の自転車おきばの後ろに戦争のころの80年前の石のかたまりがあるなんてしりませんでした」

「特にびっくりしたのが土師町に爆弾が落ちたことです。土師町に住んでいるので、本当にびっくりしました」

「みちかに行っているハンターの近くにいっぱいばくだんがおとされたなんておどろきました」

● 15年続いた戦争

「竹内先生がせんそうをやっているときにうまれていて、お母さんにだっこされながらぼうくうごうにかくれたのをきいてびっくりしました」

「竹内さんはおじさんが戦死したといったことに深く心に残りました」

「日本が戦争を終えたのが、たった80年前なのは思っているよりみ近でおどろきました。おばあちゃん（中国生まれ）が98歳だから18歳ようやく戦争が終わったのを知りました。今度会う機会があったら聞いてみようと思います」

「お話を聞く前は、アメリカとの戦争しか知りませんでした、中国とも戦争したことを知り、とてもおどろきました」

「日本も昔は中国やアメリカと戦争をして終わったときには約310万の人たちが亡くなったことにすごくこわくて悲しいです」

「15年間も続いた日本の戦争で戦死者が約310万人もいることを初めて知っておどろきでした」

「戦争で死んだ人がアジアで2000万人以上いるのが悲しいです」

「年表に戦死者約310万人とかいてありました。玉垣小学校何校分かなと思い、計算してみると約3875校ということがわかりました」

● 戦争をなくすには

「戦争で作られた工場とかを重要文化財に指定したほうがよいと思います。なぜなら戦争の経験を受けついでいかなければいけないからです」

「赤きっぷのようにお父さんやお兄ちゃんが戦死などしたりするのはイヤだからもう戦争

はしちゃだめだと思います」

「あらためて戦争はダメだと思いました。

その話を大人になってわすれずに戦争は『こわい』という心を持ちつづけます」

「私が今できることは戦争はいけないと思うことだと思います。みんなが戦争がいけないと思ったら戦争がなくなると思うからです」

「お話を聞いて戦争はだめだと思いました。戦争をすると多くの人 disappears し、自分たちのお父さんやお兄ちゃんが戦争に行ってしまうかもしれません。早くロシアの戦争が終わってほしいです」



3年ぶり鈴鹿ハンターの「風の街の文化祭」に参加 「いまある施設はどんな軍施設跡にできたか」一覧表を展示

コロナ禍で2年休んだ鈴鹿ハンターの「風の街の文化祭」が10月23日開かれ、「市民の会」も参加しました。センターコートにボードを並べて、戦争遺跡関連の展示をしました。今回から新たに、いまある学校や会社にかつてはどんな軍施設があったか一覧できる表を掲げ、当時の写真とポスターなどを展示しました。



移築された鈴鹿海軍航空隊の正門・番兵塔

鈴鹿海軍航空隊の敷地内にあった戦争遺跡は殆どが2011年に破壊されました。

破壊されたものは、3棟の巨大格納庫を筆頭に、確認しただけでも発動機整備場、自動車庫、射撃訓練所、号令台、コンクリート塼、貯水槽などがあり、保存できなかったのが残念です。

その中で、形をとどめているのが正門と番兵塔です。



○正門

正門は、石材を組み合わせたもので、左右で一對になっています。

向かって右側の門の前に「鈴鹿海軍航空隊」という銘板があったことがわかり、今でもその跡が残っています。

どちらの門にも、真ん中に鉄格子がありますが、2015年頃につけられたもので当時のものではありません。

かつては両側にコンクリート塼が続いていたので門らしかったですが、今はポツンと立っています。



○番兵塔

門で見張りをしている兵隊が使ったものと言われています。海軍の番兵塔が残っているのは県内ではここだけです。陸軍では津市久居の自衛隊敷地内に、陸軍歩兵第33連隊のものが残っています。

○元の場所でないことに注意しましょう！

見る時に覚えておきたいのは、正門も番兵塔も元の場所ではないことです。下の写真を比べて見ると違いがわかります。番兵塔を見て下さい。元は左側にあったのに、今は右側に移築されています。そして、左右の正門は道幅に合わせて間が広がっています。



さらに、正門も番兵塔も再開発の時に、かなり後方に下げられています。もともと、下の写真の●の所に正門がありました。「場所が変わっているよ」「昔のままじゃないよ」と後世に伝えることが必要です。近くに説明板はありますが、移築したことは書かれていません。 (文責 岩脇 彰)



元の配置(左)と現在(右)



おらせ

いつでもどこでも個別に対応します ~戦争遺跡見学会~

毎年夏休みに親子戦争遺跡見学会を企画してきましたが、コロナ対策を考えて個別に戦争遺跡の案内をいたします。

- ① 徒歩または車をご用意ください。
- ② ご希望の戦争遺跡、集合する時間と場所を決めます。
- ③ 当会のガイドがご案内します。

参加される人数は何人でも構いません。お一人でも大丈夫です。学校やコミュニティ単位の学習にも対応します。

ご都合のよい日時でご相談下さい。ただし、当会のガイドが対応できない日もありますので、ご了承下さい。日程が重なったときは先着順に対応いたします。

申し込みは竹内（090-2772-1476 ta818hi@mecha.ne.jp）まで

第6回 桜の森公園 春まつり は 4月1日 に

現在、防災公園として知られている「桜の森公園」は、戦争中は鈴鹿海軍航空隊の基地でした。その事実を皆さんに理解していただき、悲惨な戦争を忘れることなく、平和を願うために毎年春まつりが開催されてきました。

今回で6回目になる「桜の森公園」春まつりは、来年4月1日(土)に開催する予定です。残念ながら第5回の今年はコロナ禍のため、中止となりましたが、第6回はぜひ実現できたらと思います。



▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

発行 鈴鹿市の戦争遺跡を保存・平和利用する市民の会

代表 竹内 宏行・中森 成行

〒510-0254 鈴鹿市寺家 1-2-47

電話 059-388-6508

Mail ta818hi@mecha.ne.jp

△▼△▼△▼▼△▼△▼△▼△▼△